

エリア・レヴィタと『ボヴォの物語』
 —— イタリアにおけるイディッシュ的融合 ——

石 田 基 広

Elia Levita und sein <Bovo-bukh>
 Eine jiddische Symbiose in Italien

Motohiro ISHIDA

Abstract

Das Bovo-bukh ist eine jiddische Erzählung, die der berühmte Hebraist Elia Levita in der Renaissancezeit anhand einer italienischen Vorlage bearbeitete. Es soll sich beim Bovo-bukh um die sogenannte <Judaisierung> handeln. Unter die Judaisierung versteht man eine Taktik bei den deutschen Juden im Mittelalter, die europäische Geschichte, die ursprünglich bei den Christen im Umlauf waren, in die jüdische Welt zu versetzen und Hauptfiguren zu Juden zu machen. Es gibt zwar im Bovo-bukh eine Szene, wo die Kinder des Helden nach dem jüdischen Brauch beschnitten werden, aber man bemerkt auch, daß ihre Großmutter ins Kloster eingesperrt wird. Meiner Meinung nach hatte Elia Levita keine Absicht, die Geschichte zu judaisieren. Er wollte prinzipiell seiner italienischen Vorlage treu sein und das Italienisch ins Jiddisch übersetzen. So ließ er seine Hauptfiguren auf jiddisch sprechen und denken, oder handeln, so daß er die Beschneidung hinzufügt, weil es bei den Juden selbstverständlich war, den Jungen zu beschneiden, wenn man überhaupt einen solchen bekommt. Das hat zwar die Geschichte jüdisch gefärbt, aber das ist nicht die Judaisierung, da die Hauptfiguren immer noch Christen geblieben sind. Man muß das Bearbeitungsprinzip von Elia Levita nicht als Judaisierung, sondern als ein Jiddischmachen sehen.

1 Elia Levita について

日本ではほとんど知られていないが、ルネッサンス期の代表的ヘブライ文献学者に Elia Levita がいる。彼はユダヤ人で、その生涯のほとんどをイタリアで過ごしたが、生まれはドイツであった。従って、母語はドイツ語、それもユダヤ人独自の特徴を帯びた方言で、イディッシュ語学では西イディッシュ語とも呼ぶ。この時代、ユダヤ人達がドイツからイタリアへ移住することは珍しくなく、あるいはドイツでの迫害を逃れるため、あるいは生活の向上を望んで、彼らは生地を去って行った。ルネッサンス期のイタリアでは、ドイツに比べ、ユダヤ人にも様々な領域でかなりの自由が許されていたのである。そのため、古くからこの地に暮らしていたスペイン系ユダヤ人（セファルディーム）と並んで、ドイツ系ユダヤ人達（アシュケナジーム）も、イタリアで有力なコミュニティを形成していた。

Elia Levita の人生を辿ると、当時のイタリアのユダヤ人達の環境が見えてくる。そこで少し詳しく彼の生涯を追ってみたい。^{*1}

Elia Levita は、正確には Elia ha-Levi ben Asher Ashkenazi と自ら記しているが、初期にはまた Elia Bachur と自称している。Bachur はヘブライ語で「独身者」の意味だが、彼の場合、結婚後もこのあだ名を用いているため、自分の若さ、未熟さを謙遜した表現と解釈されている。

さて先に触れたように、Levita はドイツに生まれた「ドイツ系ユダヤ人」である。彼は1469年 Nürnberg 近郊の Neustadt an der Aisch で生まれた。青年時代にユダヤ教の宗教学校である yeshiva に通っていたであろうと推測されるが、確かではない。ただ父親 Rabbi Asher Levita からユダヤの伝統的教育を受けたと、彼自身が証言している。その後、恐らく1492年から1495年までの間に、彼はイタリアに向けて出発したと思われる。理由も明らかではないが、当時ドイツで頻発した迫害を逃れるためだとするのが妥当であろう。

イタリアでは Venice に短期間滞在した後、Padua に居を構えている。15世紀末 Padua は Verona, Rovigo と並んでイタリアにおける最も重要なユダヤ人コミュニティの所在地であった。特に Padua はアシュケナジームの一大拠点であった。

一般にこの時代のヨーロッパ・ユダヤ人社会に関しては、伝統、規律、文化的独自性に厳しいドイツ系ユダヤ人と、周囲のキリスト教文化に寛容なスペイン系ユ

* 1 続く記述は次の伝記研究に多くを負っている。Gérard Weil(1963): *Élia Lévitá, Humaniste et Massorète*. 1. Aufl. Leiden(E. J. Brill).

ダヤ人とは対比されることが多い。しかしドイツにおいても、ユダヤ人は周囲のキリスト教文化の強い影響を受けており、保守的なラビがいかに批判しようと、またしばしばドイツ人側からの迫害に見舞われようとも、日常生活において一般のユダヤ人民衆が身近なキリスト教徒との交流を絶つことは決してなかった。この傾向はイタリアではましてや強く、ドイツから移住してきた宗教指導者達も、イタリアでは様々な面で寛容な判断を下すのを余儀なくされた。

Levita は Padua でヘブライ語写本の Kopist として生計を立てる一方、キリスト教徒の人文主義者達にヘブライ語を教授している。このため後の多くのヘブライ学者達が Elia の直接の弟子である。いずれにせよ、個人教授はこの後も彼の重要な生計手段の一つであった。

1508年に彼は最初のヘブライ語の著作を出しているが、原稿を託した人間のミスにより、別の名前で出版されてしまった。この取り違えを Levita は生涯嘆き続けた。一方この頃、1506年から1507年にかけての11カ月を費やし、彼はイディッシュ語による騎士物語《Bovo-bukh》『ボヴォの物語』を完成させている。当初は写本の形態で流布し、34年後に印刷刊行された。

1509年のイタリア戦争は、Levita の家族をはじめ多くのユダヤ人を Venice へと避難させた。Venice では二つのイディッシュ語による風刺詩を残している。

1515年 Levita は Rome に移った。ここで彼は、後に枢機教となる Egidio de Viterbo をパトロンに、その後の約10年間を彼の屋敷で何不自由なく過ごす。de Viterbo が彼を受け入れた理由は、ヘブライ語、さらにはユダヤ神秘主義カバラについて知識をえるため、そして関連文献の筆写を依頼するためであった。Pico della Mirandola や Johannes Reuchlin に代表されるように、カバラは当時の人文主義者達の強い関心を引いていたのである。

1527年 de Viterbo の不在中に Levita 一家は皇帝カール5世の軍隊を避けて Rome を脱出し、その後各地を転々とした末、1529年に Venice に戻ってきている。この間 Venice では Daniel Bomberg によりヘブライ語印刷所が設立されていた。この頃は、キリスト教徒によって、多くのヘブライ語印刷所が各地に造られた時代でもあった。Bomberg の印刷所はその最も重要なものの一つである。Levita はここで編集者、校正者、そしてヘブライ文献学者として活動し、彼の代表作である《Massoret ha-Massoret》(1538)も印刷されている。ちなみにこの書は、伝承されているヘブライ語聖書本文に付されている母音記号が、後世の、いわゆる「マソラ学者」による創作であると論証したものだが、保守的なラビ達は、モーセの啓示をないがしろにするものとして彼を攻撃した。ここでその内容に深く立ち入る余裕はないが、少なくともこの著作に、これまで

のユダヤ聖書学者とは異なる、ルネッサンス人として彼の学問的態度が認められる点に注目したい。すなわち彼は伝統的なユダヤ神学の前提を離れ、当時のキリスト教徒側の人文主義者と共通する「文献学的方法」に基づいた解釈を試みたのである。

晩年、彼の名は広くヨーロッパ中に知れ渡っていた。Sebastian Münster は Levita の著作の多くをラテン語へと翻訳しているし、1538年にはパリ大学のヘブライ語教授の座を提示されている。最も、彼はこれを断っているが。その一方で、1540年、Reuchlin の弟子で Württemberg 近郊 Isny にヘブライ印刷所を開設していた Paulus Fagius に招かれ、そこで活動を始める。ここで彼は多くのヘブライ語の辞書、ヘブライ文法に関する著作を発表するが、その中には、ヘブライ語を、ドイツ系ユダヤ人にとっては「俗語」であるイディッシュ語によって解説した著作や、キリスト教徒の学者達のため、ヘブライ語・アラム語をラテン語、ドイツ語で解説した語彙集などがある。しかしイディッシュ文学にとって重要なのは、《Bovo-bukh》『ボヴォの物語』がここで初めて印刷されたことである。Levita は1543年5月には Venice に戻っている。そして旧約『詩編』のイディッシュ語訳を1545年に刊行した後、1549年1月5日にその生涯を終えた。

ところでこのようにヘブライ文法学者である Levita が、「女」の言葉、俗語とされたイディッシュ語で書き上げた作品を、多くの Levita 研究家は重要視していない。例えば、本論の対象である『ボヴォの物語』がそうであるが、その執筆の動機について、これまでの研究者達は、彼の個人的趣味、過酷な現実である戦争からの逃避、あるいは生計の手段に求めている。^{*2}

つまり、こうした「俗語」による活動は、彼の「本来の」学問的業績とは別次元の仕事と判断されている。しかしながら Levita の俗語重視の姿勢には、ルネッサンスの時代的傾向を見い出せる。Jean Baumgarten は、Levita のイディッシュ語による作品の歴史的意味を、ダンテの『神曲』に比べている。すなわちダンテは敢えて俗語で作品を発表することによって「俗語の復権」を主張したが、Levita にとってのイディッシュ語もまさに同じような位置を占めるものであったのだ。^{*3} 例えば、上でも触れたように、Levita はそのヘブライ語研究

* 2 後で取り上げる M. Schüler などがそうである。M. Schüler (1917): Das Bovo-Buch. In: Zeitschrift für Hebräische Bibliographie, XX, S.83-94, hier S.85.

* 3 Jaen Baumgarten (1993): Introduction à la littérature yiddish ancienne. 1. Aufl. Paris (Cerf), S.208f. ダンテの俗語論については、田中克彦：言語からみた民族と国家（岩波書店、1993）。

において、語義の説明をする際、イディッシュ語を積極的に利用している。彼にあっては、ヘブライ語の文献研究と、イディッシュ語による活動は決して矛盾するものではなかったのだ。

なお、Levita の作品を語る場合に忘れてはならないのは、『ボヴォの物語』と並んで中世イディッシュ語文学を代表する《Paris un Vienna》『パリスとウィエンナ』の改編者が、やはり Levita ではないかと論議されていることである。同じ時代にイタリアで印刷されていること、またイタリア語原典からの翻案の姿勢、文体などから、Levita をおいて他にこれを成し遂げうる文人はいないとされるのである。^{*4} しかしながら、近年発見された完本の序文では、翻案者は自らを「Levita の弟子」と述べている。^{*5} これが文字どおりに解釈されるべきなのか、それとも Levita 自身の秘密めいた虚構なのか、明らかではない。現在 E. Timm, Ch. Shmeruk らによって『パリスとウィエンナ』の校訂本が準備されているとのことだが、そこでこの問題に何らかの結論が出されるのを期待したい。

以上、彼の履歴を概略した。聖書学、ヘブライ学の領域において彼は、19世紀比較セム語学が始まる以前の時代に、ヘブライ語の代表的な文法書を記し、またヘブライ文献学を基礎づけた先駆者とみなされている。その一方で彼は、「聖なる言語」に対して「俗語」と軽視されていたはずの中世イディッシュ語による著述を残した文人でもあるのだが、この方面での彼の活動は、上でも触れたように、副次的なものとみなされがちで、彼の世俗文学には未だ校訂本がない。そのため、イディッシュ文学一般について論じた主要な著作を見渡しても、Levita の作品については不完全か、あるいはもっぱら推測に基づく記述しかなくされていない。これは他の中世イディッシュ語作品にも言え、中世イディッシュ語文学については未だ不完全、不正確なイメージが先行し、その全体像は誤解にみちたままなのである。^{*6}

前置きが長くなったが、本論では Levita の代表作である《Bovo-bukh》『ボ

* 4 Helmut Dinse (1974): Die Entwicklung des jiddischen Schrifttums im deutschen Sprachgebiet. 1. Aufl. Stuttgart(J. B. Metzler), S.61.

* 5 Baumgarten(1993), S.231

* 6 Helmut Dinse/Sol Liptzin(1978): Einführung in die jiddische Literatur. 1. Aufl. Stuttgart(Sammlung Metzler Band 165).

入門書としての制約もあろうが、この書の世俗文学を取り扱った箇所では、現存しないイディッシュ語版『トリスタンとイゾルテ』や『パルチヴァール』まで言及されているが、推測でしかない。

ヴォの物語』について、過去の議論を検討しつつ分析したい。またその過程において、中世のユダヤ文化、イディッシュ語ならびにその文学にも触れることになる。

2 中世イディッシュ語『ボヴォの物語』

始めに《Bovo-bukh》『ボヴォの物語』についてもう少し詳しく解説したい(以下 Bovo と記す)。*⁷

Levita の Bovo は中世ヨーロッパに広く流布した伝承にさかのぼり、様々な言語、すなわちアングロ・ノルマン語、ウエールズ語、ノルウェー語、アイルランド語、古フランス語、イタリア語、オランダ語、ロシア語、さらにイディッシュ語版を介してルーマニア語による写本ないし印刷本が残されている。ドイツ語による伝承がないことが注目されよう。イディッシュ語版が存在する一方、(高地)ドイツ語版が伝承されていないのは『パリスとヴィエンナ』に共通し、中世ヨーロッパ・ユダヤ人の果した文化媒介者としての機能の面から興味深い、本論では立ち入らない。Bovo では一節が 8 行からなる ottavia rima が用いられているが、ちなみにキリスト教徒ドイツ人によるこの韻律の用例は 1626 年までない。*⁸

Bovo の原型については、13 世紀に由来する古フランス語もしくはイタリア語による写本がその形態をもっとも忠実に残しているとされる。Levita は後者のうち、後のトスカナ方言版を彼のイディッシュ語版の原典としたとされる。現在では 1497 年のトスカナ版が Levita の直接の Vorlage とほぼ特定されている。イディッシュ語世界で Bovo はその後も多くの版を重ね、Prag(1660 年)、Amsterdam(1661 年)、Frankfurt a.M.(1691 年)、Wilhelmsdorf(1724 年)、Prag(1767 年)などと、絶えることなく印刷されている。18 世紀の後半には、韻文より散文へ移され、またタイトルも《Bobe-mayse》となった。mayse はイディッシュ語で「物語」を意味する。さらにまた、Bovo 自体も、イディッシュ語で「おばあちゃん」を意味する Bobe と混同され、「おばあちゃんの語るおとぎ話」と

* 7 続く伝承史に関しては次の博士論文による。J. C. Smith(1968): Elis Levita's Bovo-Buch. A Yiddish Romance of the Early 16th Century. (Diss. Cornell 1968) Ann Arbor, University Microfilms 69-5777.

* 8 Benjamin Hrushovski(1964): The Creation of Accentual Iambs in European Poetry and Their First Employment in a Yiddish Romance in Italy (1508-1509). In: For Max Weinreich on his seventeenth birthday. 1. Aufl. The Hague(Mouton), S.108-146.

して、ついには奇想天外な話を表す概念にさえなっている。例えば、かつてイディッシュ語の話し手は、相手の話が信じられないときなど、「ボヴォの話はやめてくれ」と対応したという。^{*9}

このようにイディッシュ語における長い伝承の出発点となる Bovo だが、すでに述べたように、1541年、Fagius の印刷工房で初めて上梓された。テキストの巻末には、Levita 自身の監督の下、彼の二人の孫によって活字化されたと述べられており、その意味からこれを「定本」と呼ぶ研究者もいる。^{*10} 最も、Levita の改編は1507年のことであり、その間34年は写本として伝わっていた。現在二つの写本が確認されているが（そのうち一つは戦後行方不明となっている）、細かい点で印刷本とは異なる。この相違については Erika Timm による研究があり、女史はここに老境に達した Elia の心境の変化を見い出している。^{*11}

次に以下の論述での必要上 Bovo の内容について要約しておきたい。

ロンバルディを司る大公ギュイドンは老齢になるに及び、ブルゴーニュ王の娘、麗しのブランドニアを妻に迎える。そして彼女との間にボヴォが生まれる。しかしブランドニアは高齡の夫を疎み、王の宿敵ドードンと謀り、王をだまし討ちにする。ブランドニアは国をドードンに譲り渡し、彼と一緒にいる。そしてボヴォを幽閉すると、毒殺しようと試みるが、ボヴォは辛くも逃げ出す。彼は海岸にたどり着くと、出航まぎわの商船に身分を偽り乗りこむ。やがて船はアルモニアの国に着き、船乗りたちは彼をその国の王に奴隷として売り渡す。アルモニア王には娘がおり、ドゥルジーナと言ったが、彼女はボヴォに一目惚れする。彼女にはサルタンの息子ルシファーが求愛していた。やがて武力をもって攻め入って来たサルタンはアルモニア王を捕らえてしまう。だがドゥルジーナから無敵の剣ポメレと駿馬ロンデレをえたボヴォは勇敢に戦い、王を救い出し、サルタンの息子をうち殺す。そして自分の本当の身分を告白したボヴォとドゥルジーナとの婚約が発表されるが、ボヴォは宮廷の裏切り者の策略でサルタンの手に落ちてしまう。あわや首を切り落とされる寸前、彼はサルタンの

* 9 Max Weireich(1928): Bilder fun der yidisher literaturgeshikhte [in Yiddish]. 1.Aufl. Vilna(Tomor), S. 152.

* 10 Erika Timm(1991): Wie Elia Levita sein Bovobuch für den Druck überarbeitete. In: Germanisch-romanische Monatsschrift 41, 1, S.61-81, hier S. 65.

* 11 ibid.

娘マルグレーテによって救われる。彼女はボヴォをイスラム教に改宗させようとするが、ボヴォは拒絶する。ボヴォは再びこの窮地を脱し、アルモニアに戻ると、ドゥルジーナはマカブルンと称する貴族との結婚を周囲に強要されていた。ボヴォは彼女を奪うとロンデレにまたがり逃走する。彼らは森の中に逃げこみ、そこで生活を送る。マカブルンは追手として半獣のペルカンを送るが、ボヴォとペルカンは激しい戦いの末、ドゥルジーナの仲介を入れ、友情を誓い合う。やがて彼らは森の中の城にたどり着く。その城の大公はドゥルジーナの叔母を妃にしており、彼らを歓迎する。しかしながらマカブルンの軍がその城を取り囲み、ボヴォらは再び逃亡を強いられる。この逃亡の最中にドゥルジーナはボヴォとの間に双子を産む。彼らのためペルカンは近隣の修道院から食料を奪い、彼らを保護する。やがてボヴォは家族をロンバルディに連れ船を探しに出るが、彼の不在中に二頭のライオンがペルカンを襲い、彼を引き裂いてしまう。途方に暮れたドゥルジーナは双子を連れて父王の待つ国に戻る。森に戻ったボヴォは、皆ライオンにやられてしまったのだと思い、悲嘆にくれ、放浪の旅に出る。やがて偶然から、彼は育ての親であるジニバルトの軍勢に加わり、ついに宿敵ドードンを倒すと、母親を修道院に閉じこめ、ロンバルディの国を再び手にする。平和の中、サルタンの娘マルグレーテより、サルタンの死後勃発した戦争への援助を求める手紙が届く。ボヴォは軍を率いると、バビロニアに向かい、マルグレーテを救う。マルグレーテは感謝のしるしとして、バビロニア全土を彼に譲り渡すとともに、ボヴォの妻になると誓い、改宗する。ボヴォとマルグレーテが結婚するとの知らせはドゥルジーナの許にも届く。彼女は双子を連れ、バビロニアに赴く。ボヴォは彼女を認めると、マルグレーテを彼の親友でジニバルトの息子であるティリックと結婚させ、またバビロニアも彼に譲り、自分は妻子とともに故国に戻り、その後長く幸福に暮らした。

以上がかつてのイディッシュ文学のベストセラーとも言える Bovo の内容である。要約ではあるが、娯楽性に富んだ作品構成が窺えないであろうか。「初版」後400年以上もユダヤ人社会に受容され続けてきたのも不思議ではない。

ところで Bovo に関しては、イディッシュ語学・文学との関連で、大きく三つの問題が設定されよう。第一に、Levita は、元来キリスト教徒の側の伝承である物語を(キリスト教それ自体に由来するものではないが)、ユダヤ教徒達のために改編ないし改作したのか。第二にイディッシュ文学史は Bovo をどのように位置づけるべきであるのか。第三に Bovo の言語の現代イディッシュ語との関係。この三つの問いは、今日もなお、イディッシュ学の最大の問題点である。

本論では最初の二つの問題に取り組み、第三の言語の問題については別の機会に論じたいと思う。

3 中世イディッシュ文学におけるユダヤ化について

まずユダヤ化という概念自体について説明しておきたい。^{*12} ユダヤ教は、その信者の生活に関し、食事から入浴まで、非常に細かい規律を課しており、こうした戒律を基盤にユダヤ人の社会と文化は成り立っている。同時に彼らは、キリスト教徒に対立する宗派として、古来多くの迫害を経験してきた。例えば、ゲットーは近世までのユダヤ人に対する迫害を象徴する制度としばしばみなされている。しかしながらユダヤ教徒とキリスト教徒は互いに非常に異なったグループとして、完全に分離された生活を送って来たと考えるのであれば、それは誤りである。これはある意味で当然のことなのだが、彼らは日常きわめて密接な関係を保っており、通りや市場での交流はもちろん、時には相手の教会の儀式に参加しあうことさえ珍しくなかった（改宗を勧めるためユダヤ人が強制的にキリスト教会に通わせられたこともあった）。キリスト教会での賛美歌の形式が、ユダヤ教会の儀式に影響を与えているのを問題視するラビの報告すら残されている。そもそもゲットー自体、特にドイツにおいては、強制されて成立したものではなく、同じ職人の仲間が一定地域に集まるのと全く同じように、もともと自然に成立したものであった。ユダヤ教徒とキリスト教徒の間にほとんど垣根はなかったのである。従って Bovo のような作品がユダヤ人の間に浸透していったとしても何ら不思議はない。アーサー王と彼をめぐる騎士達の伝承(Artus-hof)や、さらにはいわゆるドイツ民衆本など(Magelona, Fortunatus, Till Eulenspiegel)も、ユダヤ人社会に入りこんでおり、そのイディッシュ語版が現在残されている。^{*13}

*12 続く記述には Smith(1968) 並びに次の書を参考にした。Moritz Güdemann (1880): Geschichte des Erziehungswesens und der Cultur der abendläischen Juden während des Mittelalters und der neueren Zeit, 3 Bde. 1. Aufl. Wien 1880, Neudruck Amsterdam 1966. Rudolf Glanz(1968): Geschichte des niederen jüdischen Volkes in Deutschland. 1. Aufl. New York(YIVO).

*13 Wirnt von Grafenberc の《Wigalois》のイディッシュ語版が《Widwilt》、通称《Artus-hof》として伝承されている。その最古の写本には15世紀前半に成立したとみなされる。Rober G. Warnock(1981): Wirkungsabsicht und Bearbeitungstechnik im altjiddischen >Artushof<. In: ZfdPh 100, Sonderheft, S.98-109. また民衆本では Arnold Paucker(1961): Das Deutsche Volksbuch bei den Juden In: ZfdPh 80, S.302-317.

これらのイディッシュ語の伝承は、近年になって初めて発見されたものばかりではない。啓蒙主義の伝統を引き継ぐ19世紀のユダヤ系文献学者達（いわゆる「近代ドイツ・ユダヤ学」の代表者達）によって、近代的ヘブライ文献学のコンテクストですでに紹介されているのである。^{*14} ただしそのコンテクストとは、ユダヤ人のドイツ文化への完全な同化、法的平等の主張であり、この雰囲気の中で育った彼らにとって、これら中世の伝承は、ユダヤ人はドイツ文化を完全に享受できるし、また過去においてもそうして来たのだとする主張の根拠の一つと位置づけられている。従ってその言語はドイツ語以外の何物でもなかった。

これに対して、その後の民族主義を経験した20世紀のユダヤ系文献学者達は、これらの伝承にユダヤ的な特徴を見いだそうとした。その立場は、物語の登場人物から舞台設定に至るまで、完全にユダヤ人社会に置き換えられたとの主張から^{*15}、キリスト教的な要素に対してのみ検閲が行われたとする考えに至るまで、^{*16}程度の差こそあれ、ユダヤ人改編者によるユダヤ人読者のための積極的な干渉を想定する点では同じである（キリスト教徒の出版関係者がユダヤ人のためにイディッシュ語版を改編した可能性はないであろう）。またその言語も、名称はどうであれ、ユダヤ人独自の言語とみなす点でも一致している。^{*17}

筆者は以前発表した論文においてこの問題を検討している。^{*18} そこでは、これまでの研究史を概観した上で、具体的には14世紀末の「イディッシュ語」伝承で、ユダヤ版『クードルーン』とも呼ばれる英雄叙事詩《Dukus Horant》『ホラント大公』の分析を試み、一応の結論を提出しておいた。それを要約すれ

*14 例えば Leopld Zunz(1832): Die gottesdienstlichen Vorträge der Juden. 1. Aufl. Berlin 1832, Nachdruck Hildesheim(Olms) 1966, hier S.452f.

また拙論 (1993): G・ショーレムと近代ドイツ・ユダヤ学 (広島大学文学部紀要第53号, S. 142-162.)

*15 Dinse(1974), *passim*.

*16 Paucker(1961), *passim*.

*17 かつて多くのユダヤ系研究者が、テキストの内容及び言語にアプリオリにユダヤ的な特徴を見出だそうとしたことについて、次の論文の批判が参考になる。J. A. Howard(1978): Bemerkung zu einem Aspekt altjiddischer Literaturgeschichte. In: Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen 215, S.1-10.

*18 拙論 (1992): 『ドゥクス・ホラント』—あるいはユダヤの『クードルーン』 (広島大学文学部紀要第51巻, S.292-315).

ば、ユダヤ人は彼らから見て異教徒の物語をそのまま「娯楽」として享受したのであり、いわゆる「ユダヤ化」は必要ではなかったし、逆にそれは作品の商業的な成功を妨げるものですらあった。なぜなら異教徒の物語であることがユダヤ人を魅惑する要素であったからだ。それゆえ、キリスト教的な要素に対して検閲が行われたとしても、一貫しておらず、中世イディッシュ文学における絶対の規範であったとまでは言えない。一方、言語に関しては、当時のドイツ語に対する独自性はまだ明確ではないものの、その萌芽は認められる。そしてその萌芽は、中世末期には、独自の文体的効果や言い回しを有する文語へと発展しており、従って中世イディッシュ語の歴史に位置づけられる。

以上が筆者のこれまでの論述の主だった結論であった。その後も筆者は、中世イディッシュ語作品をマイクロフィルムなどを通して読解する作業を進めているが、今回騎士物語《Bovo-bukh》『ボヴォの物語』を題材に、その「ユダヤ性」を検討したいと思う。^{*19}

まず始めに、これまで Bovo を論じた主要な研究者達が、「ユダヤ化」をどのように捉えていたか、少し長くなるが概観してみたい。個々の批判はその都度触れることがあっても、全体的な検討は最後にまとめて行う。

4 『ボヴォの物語』のユダヤ性

4.1. M.Schüler

最初に Bovo についての初期の代表的研究として M.Schüler(1917)の論文を取り上げる。^{*20} 彼は Levita による「ユダヤ化」として、まずユダヤ教の聖典である旧約聖書、及びその後のユダヤ伝承を暗示させる場面を挙げている。この主張は、その後の多くの研究者達によっても引き継がれていった。テキストから例を引いてみよう。

*19 前にも触れたように『ボヴォの物語』には校訂本がない。筆者が拠り所としたのは Smith(1968)によるラテン文字への転写テキストと、印刷本全体を photocopy で再現した Joffe の版である。Juda A. Joffe(1954): Elia Bachur's Poetical Works, Volume 1, reproduction of BOVOBUCH First Edition 1541. 1.Aufl. New York(Judah A. Joffe Publication Committee).

なお、本文中でも触れたが、Smith の転写には多くの誤読があるので、疑問が生じた場合、常に Joffe の photocopy を参照した。

*20 Schüler(1917).

第4節

この地（アントナ）で彼は過ごした。
いま彼は六十の齢に達していた。
（私が倣った）本よれば
この高齢の大公はこれまで独身で
女性と関わらなかった。
しかしこれほど高齢になると
もはや毛布だけでは寒さを防げなかった。

第5節

どんな防寒具も彼には役立たなかった。
いまにも彼は凍え死なんばかりであった。
彼の部下の騎士達は言った。
「殿様、どうかお聞き入れ下さい。
遠くまで布告を出され
暖かくて若い娘を探し出すのです。
彼女にあなたを暖めさせ、お世話させるのです」
できれば彼はいつまでも一人でいたかったのだが。

これに対して旧約『列王記（上）』第一章1節には次のようにある。

ダヴィデ王は多くの日を重ねて老人になり、衣を何枚着せられても暖まらなかった。そこで家臣たちは、王に言った。「我が主君、王のために若い処女を探して、御そばにはべらせ、お世話をさせましょう。ふところに抱いてお休みになれば、暖かくなります」*21

Levita が実際に『列王記』を意識して、Bovo に原典にはない上記の章句を入れたのかどうかはこの場合重要ではない（それは大いにあり得るが）。少なくとも聖書の民と呼ばれるユダヤ人にとって、二つの箇所に対応関係は明らかであったろう。

また Schüler によれば、こうして迎えた妻が王の臣下と謀り、王を殺す次の場面は『コヘレトの言葉』第七章28節を連想させるという。

*21 新共同訳聖書：（日本聖書協会、1987）を参照。以下同様。

第32節

紳士淑女の皆さん。
悪妻からは何という不幸が起きるでしょう。
彼女たちは自分の夫を引き裂いてしまうものです。
自分たちの色欲を満たすためには。
あらゆる不幸は女性がもとなのです。
ソロモン王の書もこう言っています。
「彼は貞淑な女性を探した。
そして生涯見いださなかった」と。

この対応関係も、旧約聖書に通じたユダヤ人にはすぐに洞察されたであろう。
同様の効果は次の場面にも期待できる。

第271節

彼〔ボヴォ〕は野を越え、山を越え
必死で逃げた。
そして海の近くまでやってきた。
彼はがむしゃらに突き進んでいった。
彼の背後には大群が迫っていた。
彼らはハマンの子が殺されているを発見した。
ボヴォが彼を殺したのは間違いなかった。
彼の兄弟は泣き喚いた。

Schüler は、ここで「ハマン」がユダヤ民族にとっては特別なコノテーションを持つことを指摘している。旧約では『エステル記』に関連し、そこでハマンはユダヤ民族全体の敵として描かれている。Bovo では、敵である異教徒の追手をハマンと呼んでいるわけである。民族の敵としてのハマンのイメージが古来ユダヤ民族にとっていかに強いものであるかは、例えばユダヤ系の作家であるエリアス・カネッティの自伝にも窺える。

「ハマンは広く知れ渡った人物であったし、その名は日常語のなかに入りこんでいた。〔中略〕《ハマン》は止めの言葉、深い嘆息、しかも侮辱であった」*22

*22 エリアス・カネッティ (岩田行一訳)：救われた舌 (法政大学出版局, 1981, S.30)。

この他、旧約聖書との関連では、主人公 Bovo と異教徒の巨人との一騎打ちが、明らかにダビテと巨人ゴリアテの戦いを思い起こさせる。

これに対しては、後に触れる J. C. Smith(1968) のように、旧約聖書の知識はキリスト教徒の側にもあったのだから、旧約を暗示させる場面を自動的に「ユダヤ的」とみなすのには批判的な考えもある。^{*23} しかし、たとえキリスト教徒と共通の知識であったとしても、これらの章句の旧約との関連が、ユダヤ人読者を物語世界へ引きこむ上で効果的であったのは否定できないだろう。もっとも、Levita がそのような効果を狙ってこの章句を組み入れたのか、つまり彼は舞台、登場人物を意図的に「ユダヤ化」しようと考えたのか、Schüler は述べていない。

一方 Schüler はまた、Bovo には「ユダヤ・ドイツ文学一般に共通する倫理的・宗教的考察」が認められるとして、作品の巻頭及び巻末を飾る詩を挙げている。少し長くなるが翻訳してみたい。

第1節

神を永遠に讃え
彼の奇跡を思い起こせ。
神は敬虔な者の口に
賞賛されるのだから。
神は地にも天にも無敵で
神への賞賛は尽くされない。
人間には讃えきれない。
なぜなら神には始めも終わりもないのだから。

第649節

さて私は言おう
誰がこの書を著したかを。
彼は自分をエリア・バフルと称している。
彼はこれに丸1年を費やし
ユダヤ歴267年〔西暦で1507年〕に完成した。
彼はこれをニサン〔ユダヤ歴で1月〕の月に完成し、イヤルの月〔同2月〕に始めた。

*23 Smith(1968), S.26.

神が我らを悪魔の手からお守り下さいますように。

第650節

また神が我らをあらゆる苦しみからお救い下さり
さらに我らがメシアの時代を迎えられるのを
お許し下さいますように。
また我らをエルサレムまたはその近くの村に導かれ
我らのため、神殿を再建して下さいように。
かくあれかし、アーメン。

同じ理由から、ボヴォが奴隷に売られる場面がユダヤ的とされる。

第94節

それゆえ、皆さん、とくとお考えあれ
大公の息子に生まれても、このような目に遭うのを。
誰も現世の富をあてにはできませんぞ。
この先自分がどうなるか
どんな不幸が襲ってくるか、誰にも分からないからです。
この世は階段のようなもので
昇る者がいれば、転げ落ちる者もいるのが常。

Schüler は、こうした場面に見られる「敬虔さ」はユダヤ教徒に固有のものだと判断している。また Schüler は、引用した第94節の最後の二行に見られるように、Levita には「ドイツ語の諺」を好む傾向があると指摘している。彼は、広い意味ではこれらも「ユダヤ的」とみなしているようだ。後で触れるが、中世イディッシュ文学者 Max Erik は、こうした諺を改編の際に組みこむことも「ユダヤ化」の手段とみなしている。

Schüler のいう「ユダヤ的敬虔さ」との関連で、彼が「ユダヤ的」と指摘する場面をさらに引用しておきたい。ボヴォがイスラム教への改宗を拒否する場面である。

第246節

そこで彼は答えた
「私が自分の信仰を捨てるなどとは

考えない方がよいぞ。

たとえおまえが王国すべてを私に寄こそうとも

私は全能なる偉大な一神を信じるのだ。

私は神の命にそむきはしない。

私は神の聖なる御名を忘れはしない。

神のためなら私は喜んで絞首刑でも、火あぶりにでもなろう。

第247節

神は私の創造主であり

決して私を見捨てず

これまで救いの御手を差し伸べ給いた。

私は神の聖なる御名に絶望などしない。

だから改宗など求めるな。

これ以上脅しても無駄だ。

私が神を去るなどと考えない方がいいぞ。

私は生ける神を死んだ神と交換したりはしない。

しかしこの場面を「ユダヤ的」とみなすのは、果たしてどうであろうか。確かに「神の御名」という文句は、ヘブライ語で神を意味する子音四文字を神聖視するユダヤ教的小説的コンテクストを思い起こさせはする。しかし、仮にこの場面がそのまま他のキリスト教側の伝承に現れていたとして、これを違和感なく「キリスト教的敬虔さ」と主張することもできるであろう。「敬虔さ」の表現すべてを「ユダヤ化」の意図から生じた改編と断定してしまうのには、先の旧約聖書を暗示させる場合同様、慎重さが必要であろう。

これとは対照的に、登場人物が明らかにユダヤ人と設定されている場面がある。まず深い森の中から子供を連れて父王の許へ帰ったドゥルジーナが、自分の子供達はまだ「割礼」を済ませていないと訴える場面がある。

第498節

彼女は言った「父上、彼らはまだ割礼を済ませていないのです」

王は答えた「案じるな

明日立派な割礼式を行おう」

第499節

次の日

王は彼らに割礼を受けさせた (judischen)。

彼はドゥルジーナに尋ねた

「名前は何と名付けようか。言ってくれ」

彼女は答えた。「ボヴォが私達の許を去る前

彼は私にいつもこう言っていました。

「私は双子のうち、一人は父上にならってギュイドン

もう一人は、私の保護者の名をもらってジニバルトと名付けたい」

この場合、割礼の儀式だけではなく、この日に名前を授けるのも、中世ユダヤ人の習慣であったのを付け加えておきたい。また次に挙げる節では、登場人物の一人が自分はユダヤ人だ (Jüdin) と、はっきり言い切ってさえいる。

第386節から第387節

彼女は言った。「神(bore orem)にかけて誓いましょう。

あれはわが姪(krowo)ドゥルジーナです。歓迎(sholom)しましょう。

彼女が見目麗しい青年ボヴォを連れているのは

私がユダヤ女(judin)であるのと同じくらい確かなことです。

またいま引用した詩句には、多くのヘブライ語系単語が認められる。ヘブライ語の使用も、テキストを「ユダヤ化」するための手法としてしばしば指摘されるものである。

第140節

彼らはあちらこちらの国をさまよい

貧民施設(hekadesch)を転々とした。

特にヘブライ語系の単語が多いのは、重要な宗教儀式を要求する結婚式の場面である。

第300節

ボヴォはこれを聞くと

心の中で喜んだ。

「ぐずぐずしていはいられない。

すぐ披露宴 (berukhim ha-yoshvim) にはせ参じよう。

第344節

皆が食卓に招かれ

たらふく食べると

彼らはしばし座り

新郎新婦(chosen un kalla)のために歌い

彼らを一つの部屋に招き入れた。

第612節

朝、ボヴォは法廷を開廷し

他国の者にも自国の者にも

また諸王、諸侯にも告げ知らせた。

結婚式のために準備を整えよ。

式は、幸運にも (bmazl tov)

ニサンの月の一日(ros chodesch nisan)に執り行くと。

使者達は諸国へ派遣された。

バヴィロニアでは準備に大わらわであった。

第638節

彼は二人に誓いの言葉を言わせ

結婚を誓わせた。

それからボヴォはドゥルジーナにドレスを与えた。

こうしてすばらしい結婚式が始まった。

始めに天蓋が立てられた。

まことにすばらしい結婚式であった。

とても多くの異教徒 (chizonim))も参加し

三つの外国人グループが結婚の証人 (minjonim) となった。

最後に挙げた節ではヘブライ語が現れるだけではなく、ユダヤ教の伝統に従って結婚式が行われているのが窺える。例えばユダヤ教徒の結婚式では、天蓋の下で新郎新婦が誓いの言葉を交わす。また結婚を証明する証人として13人の成人男子が必要とされるが、それがこの場面では三グループもいるとして、式

の盛大さが強調されている。なお翻訳で「異教徒」とした語 chizonim はヘブライ語で「外の」を意味するが、Smith も参照している Avé-Lallement によればユダヤ教徒以外の者を意味する。^{*24} 当時キリスト教徒がユダヤ教徒の結婚式を祝いに来るのは決して珍しくなかった（その逆の場合もあった）。また、「外国人」と訳したのは fremd である。これもキリスト教徒を意味するのかもしれない。

ヘブライ語系単語の使用は以上に限られない。ボヴォは同時代のイディッシュ語による世俗文学の中でも、きわめて多くのヘブライ単語を含む作品なのだ。Schüler は指摘していないが、次の場面でのヘブライ語の利用も引用しておきたい。

第486節

彼女は言った「あなたの名前と記憶が減び去りますように(jemach schmecha wesich recha)!

一体どうして、そのようなことを私に要求できますようか!」

これは典型的なヘブライ語によるののしり言葉で、ユダヤ人達は日常用いていた。筆者はかつて《Dukus Horant》を論じた際、イディッシュ語の世俗文学においては、それらが直接キリスト教側の素材からの改編であるため、原典の言語に影響されると同時に、ユダヤ社会とは異なる世界の物語であることを強調するための文体的手法として、ヘブライ単語を極力少なくしようとする傾向が存在したと述べた。^{*25}

Bovo に現れる豊富なヘブライ語はこれに反するものであるから、その説明が改めて必要となるであろう。さらには、ユダヤ教徒独特の儀式である割礼が言及されており、キリスト教世界で展開する異教徒の物語として、舞台は一切の変更なく、そのまま受け入れられたとする筆者の以前の説と矛盾する。むしろ Schüler の述べるように、「人物、状況はしばしばユダヤのそれとして描かれている」ように思えるからだ。しかしもしこれが登場人物をユダヤ人に変えるという意味での「ユダヤ化」であるとすれば、後に出てくるボヴォの母親を「修道院」に押しこめる場面との整合性が問われなければならない。この問題は、次に挙げる Max Erik (1926, 1928) の説を考察する際、記憶に留めておかねば

*24 Smith (1968), S.616. Avé-Lallement (1862), 1 Bd. S.368.

*25 拙論 (1992), S.308.

ならない。なぜなら Erik はある意味で「ユダヤ化」は認めながら、物語自体は明らかにキリスト教世界に設定されたままであったと主張しているからだ。

要するに、ユダヤ人の読者ないし聞き手は、作品の主人公達、そして環境をキリスト教世界と受け取ったのか。それともユダヤ教世界と理解したのであるうか。結局ユダヤ化の問題の核心はこの点にある。以下、Erik の主張を見てみよう。

4.2. Max Erik

中世イディッシュ文学に関する本格的な研究は Max Erik によって始まった。^{*26} ドイツ中、近世文学がヘブライ文字によって伝承されていることは、上でも触れたように、「近代ドイツ・ユダヤ学」の文献学者によって紹介されていたが、彼らはこれらの伝承には、原典のドイツ文字を機械的にヘブライ文字に置き換えた以外に「ユダヤ的独自性」などなく、ドイツ文学史上の一変種に過ぎないとみなしていた。これに対して Erik は、それらの伝承は個々バラバラに成立した偶然の産物では決してなく、相互に関連し、古イディッシュ文学の一つの伝統に位置づけられ、またそこには独自の規範が存在したと主張したのである。そして次のような「古イディッシュ文学史」を設定した。

古イディッシュ文学期、13世紀から18世紀末

- 1 始まりと最初の発展 (14世紀まで)
- 2 最初の黄金期：イディッシュ文学の吟遊詩人時代 (14世紀から16世紀中頃まで)
- 3 過渡期 (16世紀の90年代まで)
- 4 第二の黄金時代：イディッシュ文学のムサル (倫理・教訓文学) 時代 (16世紀末から18世紀の初期まで)
- 5 古イディッシュ文学の衰退期(18世紀中旬以降) ^{*27}

^{*26} 次の二著が Erik の代表的業績であり、本論でもたびたび参照した。

Max Erik(1926): Wegn altyidishn roman un nowele [in Yiddish].

1. Aufl. Warschau(der weg tsum wisn).

Ders. (1928): Di geshikhte fun yidisher literatur fun eltste tsayt biz der haskole thekufe [in Yiddish]. 1. Aufl. Warschau 1928, Nachdruck New York(Congress for Jewish Cultur)1979.

^{*27} Erik(1928), S.21.

これによれば Levita の時代はすでに第二の黄金時代の終わりに当たる。そこで Erik は彼を「最後の吟遊詩人」と呼ぶ。しかし実際には、彼のいう「最初の黄金期」に由来する伝承はわずかで*28、同時代のユダヤ社会に関する年代記などの間接的資料から Erik が想像したものに過ぎない。*29 さらに「吟遊詩人」の概念自体が曖昧であり、要するに彼の文学史的設定が、かつてのドイツ中世文学の図式をそのまま応用したものであるのが分かる。また彼は Levita が実際に作品を朗唱して放浪したと考えるが、そのような証拠は何一つ残されていない。

いま本論では Leivita が実際に「吟遊詩人」であったのか、また Erik の年代設定が正当であるのかについての批判は行わない。ここでは、彼がどのような観点から Bovo に「ユダヤ的」要素を見い出したのかを考察することが目的である。

さて Erik は、ドイツ中、近世文学が古イディッシュ文学に受容されるに当たっては「中立化」が行われたと主張する。それによれば、キリスト教側の作品をイディッシュ語の作者(mekhaber)が改編する場合、舞台や主人公を無理にユダヤ社会に置き換えようとはせず、キリスト教的な要素に関してのみ「中立化」が行われる。Erik は、宗教的要素を「中立化する」文学史的伝統に Bovo を位置づけようと試みている。すなわち Schüler が述べたようには主人公、物語の舞台は「ユダヤ化」されないことが、古イディッシュ語文学の特徴であるのだ。Bovo には実際に割礼の場面が認められるにも関わらずである。

「ボヴォの物語は、その世俗的なイタリア語版において、全くキリスト教的な叙事詩であるが、それはキリスト教世界で成立した物語であってみれば当然のことである。イディッシュ語吟遊詩人文学である Artus-hof と全く同様に、Elia Bachur は、純粹にキリスト教的な箇所はすべて削除している。それでも主人公であるボヴォと、その一族がキリスト教徒であるの

*28 この時期に由来するまとまった分量の伝承としては、《Dukus Horant》を含む14世紀末に成立した『ケンブリッジ写本』と、先に触れた15世紀前半成立の《Widwilt》が挙げられる。

*29 しばしば引用されるのが、中世ドイツ・ユダヤ人の生活に大きな影響を及ぼした Jehude Khassids(1213 oder 1217没)の著作から編纂され、中世ユダヤ人の生活について豊富な記述を残す16世紀の《Sefer chassidim》『敬虔者の書』である。そこにはユダヤ人の女性が《Dietrich von Bern》や《Hildebrant》といった「愚にもつかぬ文学にうつつをぬかしている」との苦言が見られる。Howard(1978), S.6.

は、Bovo を裏切った母親が修道院 (kloyster) に押しこめられる場面からしても明らかだろう」*30

しかし「修道院」以外では、キリスト教徒の物語ではあっても、宗教的属性を明らかにする表現は避けられている。だから、例えば Bovo にあっては、キリスト教徒とイスラム教徒の戦争を描く原典の場面が、単に異教徒との戦いとして、何教徒が話題であるのか明らかにされず、中立化の原則が保たれているという（実際には Erik の主張にも関わらず、そしていままでも Erik に対する批判者達にも見過ごされてきたことだが、Bovo のテキストには異教徒を「モハメッドの信者」と特定している場面が数カ所ある*31)。

従ってボヴォが母親を修道院に幽閉する場面や、割礼、ユダヤ教の伝統的な結婚の場面はこの原則に反するのだが、Erik はこれを例外扱いしている。

「この箇所〔修道院への言及〕は、イディッシュ語作者(mekhaber)の技法、すなわち古イディッシュ語への翻訳の場合に特徴的で、伝統でもあった技法と一致していない。[ここ以外では] Elia Levita は宗教問題を中立化し、ボヴォやその仲間達の宗教を無視してきたのだが」*32

いずれにせよ、Erik の考えでは、古イディッシュ語文学においては主人公達はユダヤ化されていないし、またユダヤ人の受け手も、そのようには受け取らなかった。では「ユダヤ的なもの」がないかと言えば、Erik はそうではないという。

彼は musr-strofn(= dt. Strophe)の存在を挙げる。musr とはヘブライ語及びイディッシュ語で「倫理、教訓」などを意味し、読者への教訓的な呼びかけなどが musr-strofn と呼ばれる。例えば Schüler が先に指摘した作品巻頭の神への讃辞や、女性についての警告などがこれにあたる。同様に「諺」なども彼は musr-strofn の一つだという。Schüler のところで引用した「人生は梯子のようなものである」との表現も、Erik にとっては musr-strofn であり、従ってユダヤ的表現とみなされるのである。*33

Erik はこれらの表現が他の中世イディッシュ語作品、例えば《Artus-hof》『ア

*30 Erik(1928). S.192.

*31 第187節、第234節、第243節ではイスラム教徒が Mohammed の名を挙げている。

*32 Erik(1928), S.53.

*33 ibid.

ーサー王物語』や《Schmuel-bukh》『サムエル記』などにも認められることから、これら一連の表現がイディッシュ文学では一種の慣用句になっていたとさえ主張している。^{*34} しかし J.C.Smith(1968)は適切にも、これらの章句はすべて同時代のドイツ文学に見いだされるものだとして、ドイツ文学とのつながりの方を強調している。^{*35}

また Bovo ではイタリア語原典の戦闘シーンがかなり簡略化されているが、これを Erik はその場面の残忍さを避けようとする宗教的動機からなされた改編とする。そしてこうした残忍さの検閲が、《Artus-hof》にも認められることから、古イディッシュ文学の伝統であったと断定している。^{*36}

また Schüler と同じく、ヘブライ単語の利用や旧約との関連も「ユダヤ性」として Erik は指摘する。

結論として Erik は、Bovo においても作品の登場人物、環境は中立化されているが、基本的には「異教徒の物語」と理解される。しかしヘブライ語が現れ、さらには古イディッシュ文学の「規範」である musr-strofn などの利用によって、作品はユダヤ人にも受け入れやすいように改編されている。それゆえ、Bovo は古イディッシュ語で書かれたユダヤの文学であると断定される。

Bovo に関する見解の多くは、これ以降 Erik のこの仮説をほぼ踏襲している。しかしながら第二次世界大戦後、次に挙げる Judah A. Joffe は Bovo に新たに幾つかの興味深い主張を展開している。以下 Joffe の論を検討したい。

4.3. Judah A. Joffe

Joffe(1949)は Bovo を、 photocopy の方法で出版した研究者である。彼の本来の計画ではこの後、ラテンアルファベットによる校訂テキスト及び訳注を続けて出版する予定だったようだが、残念ながらそれは実現されていない。しかしこの photocopy 版に添えられた解説は検討に値する。^{*37}

Joffe において興味深いのは、彼がヘブライ単語の利用に「ユダヤ化」を認めようとはせず、むしろ一見ユダヤ的とは思えない部分に注目している点である。

「ヘブライ語の語数はイタリア語からの借用語を上回るものではない。
この種の機械的な『ユダヤ化』の手段は全く取るに足らないものである」^{*38}

*34 Erik(1928), S.53.

*35 Smith(1968), S.20.

*36 Erik(1928), S.193.

*37 Joffe(1949), S.3-17.

*38 Joffe(1949), S.16.

Joffe はこう述べる、彼の観点から「ユダヤ化」とみなせる場面を挙げていく。例えば双子を産んだドゥルジーナのため、ペルカンが修道院へ食料を調達に行く場面がある。

第458節

彼は部屋に入った。
そこにはかごにたくさんの鶏がいた。
彼は言った「この鶏を全部頂こう」
僧侶達は文句を言えなかった。

Joffe は、ユダヤ女性が養生食として鳥肉を好んだとし、その「ユダヤ性」を指摘する。もちろんこれは誤りである。キリスト教側の文学でも鳥肉は滋養食として現れているのだから。^{*39} ただ Joffe が、ヘブライ文字の利用や、割礼などの宗教儀式といった明らかなユダヤ的独自性の枠組みを越えて、それ以外の一見何の変哲もない部分にも「ユダヤ化」の存在を認めようとする姿勢は注目に値する。さらに彼が「ユダヤ化」とする箇所を挙げよう。

第25節

「妻よ、どうしたのだ」
彼は甕瓶を持ってくると言った。
「よいか、これに尿を集めるのじゃ。
他にどうして欲しいのか、言ってご覧」

ここで甕瓶を持ってくる場面は、Joffe によれば、中世ユダヤ人の習慣を反映したものとされる。

第512節

人々は言った「このように立派な御仁を
未だかつて見たことがない。
まこと彼は戦いに秀でた雄鶏に違いない。

*39 例えば、やはりイディッシュ語版の存在する中世低地ドイツ語版『パリスとヴィエンナ』を参照。Paris und Vienna. Eine niederdeutsche Fassung vom Jahr 1488(hrsg.v.A. Mante). 1. Aufl. Lund 1965.

ディートリッヒ・フォン・ベルンあるいは
ヒルデブラント公の再来に違いない」

ここで Joffe はイタリア語原典では勇者の代表として Hector, Fiorvante が挙げられているのに対して、Levita がこれを同時代のユダヤ人により親しまれていた Dietrich von Bern, Hildebrant^{*40}に置き換えているのを「ユダヤ化」と主張している。しかしながら、これについては Hector, Fiorvante がドイツ語圏では当時余り知られていなかったために過ぎないとする Timm の主張が正しいであろう。^{*41} Smith はこれは「ユダヤ化」ではなく、「ドイツ化」とであると述べている。^{*42}

面白いのは、次の場面についての Joffe の見解である。

第350節

彼らは初めて喜びを交わした。

ボヴォは望んでいたことを実行した。

ドゥルジーナは、馬小屋の中で泥棒を見つけたかのように叫んだ。

彼らが行ったことは、どうかあなた方ご自身でご想像下さい。

Erik はこの描写が「粗野」で、「宗教性及び物語としての深みに欠ける」と手厳しいが^{*43}、Joffe はこの表現がイディッシュ語宗教文書にも認められるもので、これらの文献の影響を示唆している。^{*44}

この描写のエロティシズムについて Baumgarten は、イディッシュ文学における Levita の独創性の一つであり、イタリアの環境にあって初めてこのような描写が可能になったと述べている。^{*45} つまり、他のイディッシュ文学の影響によるものではないわけである。もっとも Joffe とて、これがイディッシュ文学の特徴だと述べているわけではないが。

以上、Bovo における「ユダヤ化」について論じた初期の研究から、議論の主要な傾向を代表していると思われる三人の主張を要約した。この時代 Joffe に

*40 注29を参照。

*41 Timm(1991), S.74f.

*42 Smith(1968), S.29.

*43 Erik(1928), S.194.

*44 Joffe(1954), S.14f.

*45 Baumgarten(1993), S.224.

よる印刷本のフォトコピーこそ出版されていたが、ラテン文字による校訂本の試みはなされていなかった。一方、1968年アメリカの J. C. Smith は博士論文として Bovo をラテン文字に置き換え、その解説及び訳注を試みている。彼のラテン文字化テキストは、今日からすると、そのシステムが非常に分かりにくく、また Joffe のフォトコピーと比較する限りでも、多くの誤読が含まれている。しかしながら、完全な校訂本の出されていない現在、もっとも重要な研究であることには変わりない。そこで最後に Smith の業績の検討を経て、問題点の整理、批判を試みたい。

4.4. J.C.Smith

Smith も Erik 同様、Bovo においてはキリスト教的な要素の排除すなわち「中立化」がなされているとする。そのため Bovo は、随所にイエス・キリストへの言及がある原典のイタリア語版と比べて、より非宗教的となっていると述べる。その一方で、割礼やヘブライ単語の利用による、積極的な「ユダヤ化」があるのを認めている。しかしながら彼は、この時代に見られたユダヤ教徒とキリスト教徒の密接な関係を強調し、双方の文化で共有していた要素は、「ユダヤ化」の概念から除外するべきだという。

例えば聖書を暗示させる場面は、両方の信者に共通の知識だから、「ユダヤ化」のため挿入されたとは言えなくなる。また、Erik が *musr-strofn* として、古イディッシュ語の伝統的表現として挙げた句は、同時代のドイツ文学に豊富に見いだされるもので、Levita が創作したものでもなければ、Erik の指摘するように「中世イディッシュ文学」に独自の表現として継承されてきたものでもない。^{*46}

一方ヘブライ単語の利用についての彼の考え方を要約すれば、彼はヘブライ単語の四分の三が会話文中に現れているのを指摘する。そして、例えば結婚式の場面にヘブライ単語が現れることによって、式をユダヤ教の儀礼通りに描くのが可能になったとし、これが「ユダヤ化」の手段であるのには同意している。しかしながら、次の例に見られるように、イスラム教徒やキリスト教徒が会話文中でヘブライ単語を話す場面もあり、彼は Levita がヘブライ単語を登場人物をユダヤ人と設定するための方法として、意識的に用いていたとは考えていない。

*46 Smith は Bovo に見られる表現は Schwank や Fastnachtspiel に共通すると述べる。Smith (1968), S.20.

第249節

サルタンは言った「では処刑は先に延ばそう。
娘よ、おまえのためにだ。
もしおまえが奴を説得できたら
我らが会衆 (kohol) に加えられるだろう。

第308節

すると巡礼は大声を上げ
叫んだ
「ああ神よ (abonai)、どうか命だけはお助け下さい。

第637節

[ボヴォは言った]「彼は私に劣らない。
だからあなたは何ら恥じることありません」
マルグレーテは言った「彼が私を望むならば
私は喜んで彼を夫に迎えましょう。
これ以上ぐずぐずしても
混乱するだけ (bilbulim) ですから。

この三例のうち、二番目の abonai はユダヤ人が神を呼ぶときに使う言葉であり(adonai の別形)、ユダヤ教徒以外は用いない。Smith はヘブライ語が「ユダヤ化」、すなわち登場人物をユダヤ人とするための手段であると考えた場合、この三場面が矛盾することについて、適切な答えを見い出せないでいるようで、これ以上この問題を検討していない。

次に Schüler のところで引用した巻頭と巻末の神への賛歌に関しても、Smith は内容はユダヤ的だと認めるが、しかしこうした形式はドイツ語やラテン語の作品を模倣したものだから、聖書の場合同様、狭義の「ユダヤ化」とみなすのには慎重である。^{*47}

*47 ただし Smith は、第208節の諺では、juchas という単語の存在によって、きわめてユダヤ的内容となっていると述べる。

我らの賢人はこれにこう答えている／「人は素朴な善を尊重するが良い」／父と母の先祖の家系 (juchas) が何の役にたとう／もし彼自身が良き人でなければ」

Smith はここでヘブライ語 juchas の存在が evocative だと強調している。この単語により、この句が他の諺よりはユダヤ的になったという意味だろう。さもないければ、このヘブライ単語だけ evocative で、それ以外のヘブライ単語は違うとするのは筋が通らない。Smith(1968), S.27.

一方 Joffe の主張する「ユダヤ性」について、Smith はその多くを否定している。例えば「搜瓶」のエピソードについて、これが実際にユダヤ人独自の風習であるかどうかは問わず（ただし注では中世の一般的な療法であったと述べているが）、ユダヤ化ではなく、作品を popularize, vulgarize するためのコミカルな手法だとしている。また Dietrich von Bern, Hildebrant への言及についても、ユダヤ化ではなく、むしろドイツ化 (germanizing) だとする。これに関連して、Joffe は Bovo では名医の代表として、Hippocrates の他、イタリア語原典にはない Avicena が付け加えられている点について、Avicena が有名なユダヤ人医者であったから Levita はこれを加えたのだと述べている。これについて Smith は、Joffe の説を訂正し、Avicena は実際にはユダヤ人でなかったが、しかしユダヤの民間伝承ではユダヤの名医と理解されていたから、誤解とは言え、ここに「ユダヤ化」を認めるのは正当だとしている。

さて以下に挙げるのは、Smith 自身による「ユダヤ化」の指摘である。

第85節

そこで彼らは質問した
彼の父母はどこにいるのか
友人か親戚はいるのか、と。
ボヴォは言った「神は
我が両親に試練をお与えになりました。
彼らは貧しく、人々の喜捨で暮らしていました。
二人ともニュルンベルクの貧民院 (brauthaus) にいます。

ここで brauthaus に Smith は注目している。これは前後関係から、第140節にある hakedesch と同じく、貧者を収容する特別の施設と読める。Smith は、この種の施設は多くの場合、結婚式場や宴会場を兼ねていたが、キリスト教徒の側では Tanzhaus と呼ばれたはずで、これを指して brauthaus と呼ぶのはドイツ・ユダヤ人に独特だと主張する。^{*48}

*48 筆者は Smith の参照する文献 [Israel Abraham(1896): Jewish life in the Middle Ages. Shlomo Eidelberg(1962): Jewish life in Austria in the XVth Century] を確認することができなかった。
Baumgarten(1993, S.460)は Tanzhaus もまた、ドイツ系ユダヤ人の間で用いられたとしている。

同じように、ドイツ語起源でありながら、イディッシュ語の特有の表現として次の句がある。

第326節

さあ、巡礼に暇を告げるがよい(kom, los den weler ein gut jahr habn)。

ein gut jahr が現代イディッシュ語では、別れの挨拶として、決まり文句となっているが^{*49}、こうした用法は、中世末期以来イディッシュ語の私信などに広く認められるようになっていった。^{*50} つまりドイツ系ユダヤ人独自の語法なのである。

Smith が挙げる「ユダヤ化」にあって目新しい提案は、彼が「反キリスト教的」とする表現である。次に挙げるのは、半獣のペルカンがドゥルジーナと双子の乳飲み子のため近くの修道院を襲って食物を奪う場面である。

第450節

それで彼らは言った「ここから出て行け。
修道院はおまえの来るところではないぞ。
犬が我々に何の用があるというのか。
読み書きでも習いたいのか」
彼らは二十人ほどいたので
力づくで追い出そうと試みた。
彼らは外衣をまくりあげた。
一人が彼を木靴 (Holzschuh) で打ったので、彼はよろめいた。

ここに登場する木靴は、中世にユダヤ人を激しく迫害したフランチェスコ会を象徴するもので、この前後の場面で修道院の僧侶達がてんてこまいする様子がユダヤ人には特に訴えるものがあったというのが Smith の主張である。フランチェスコ会への当てこすり自体はユダヤ的でも何でもないだろうが、この場面がユダヤ人には痛快に響いたことはあるかもしれない。しかしながら、これ

*49 Uriel Weinreich(1977): Yiddish-English English-Yiddish Dictionary.

1. Aufl. New York(Schocken). gut の項目。

*50 Erika Timm(1987): Graphische und phonische Struktur des Westjiddischen. 1.Aufl. Tübingen(Max Niemeyer), S.384.

を「ユダヤ化」に含めるべきであろうか。Smith は次の箇所にも同様の解釈を試みている。

第222節

太陽は容赦なく彼に照りつけ、汗が止まらず
彼は暑さでいまにも死にそうであった。
あまりの渇きのため、彼はささやき声も出なかった。
また空腹のため倒れそうであった。
彼は大きな乞食袋を下げた
ドイツ人の乞食が立っているのを見つけた。
彼は瓶からたっぷりとワインを飲んでいるところだった。
そしてチーズとパンを袋から出して食べていた。

第223節

ボヴォは食べ物を祝福し、彼のために祈った。
その男はこの若者に感謝した。
そこでボヴォは、自分が回復できるような
何かを売ってくれないかと尋ねた。
乞食は答えた「お前にもわけてやろう。
同じだけ食べたらい」
ボヴォは彼の傍らに腰掛け
馬の手綱は握っておいた。

第224節

彼はパンをひとかけら食べたが、それ以上はやめてしまった。
かびだらけだったからである。
またチーズでは歯を折り損なうところだった。
結局彼は何も食べられなかった。
そこで一滴でも残ってやしないかと
コップに手を伸ばした。
乞食は思った「もしお前がたらふく飲みたいなら
俺にたっぷりワインの礼をする羽目になるぞ」

第225節

彼はガラスでできたコップを
左に下げていた。
その中には眠り薬がたっぷりと入っていた。
彼はボヴォにそれを与えた。
彼は飲み終えるや
すぐに寝入ってしまった。
そこで乞食はぐずぐずせず
彼の指から指輪を抜き取った。

Smith は乞食をドイツ人としたのが Levita による改編で、他のイタリア語版には認められないと指摘した上で、その効果について論じている。彼の考えでは、姑息な偽善者として描かれている乞食をドイツ人（キリスト教徒）と特定するのは、ドイツ人による迫害を体験してきたユダヤ人には痛快であったという。彼はさらに次の節にも同様の効果を見い出している。

第306節

「いいか、正直に言え。
さもなければ、はり倒すぞ。
お前は私の指輪をどうした。
それに私の馬はどうした」
乞食は言った「ああ、尊い騎士様
全て白状します。
馬はさいころですってしまいました。
それに指輪は、キリスト教徒の女(goie)を斡旋してくれた男にやって
しまいました。

文中の goie は、ユダヤ人から見た異教徒、つまりキリスト教徒の女を表すヘブライ起源の単語である。ここでは、キリスト教徒の巡礼及びキリスト教徒の女性の不道德さが揶揄されていると Schüler は見る。

Smith はこうした場面を、「反キリスト教的な」表現による「ユダヤ化」と呼ぶ。これについては、ユダヤ人の側も必ずしも道德的ではなく、また異教徒の不道德をなじるのは、ユダヤ教の文献に限られないのとの批判もありえよう。また中世では、ユダヤ人女性が当局から売春の許可をえるために改宗し、その

後再びユダヤ教に戻ることもあったから、この箇所の goie が厳密に「キリスト教徒の女性」を指すのか不明である。

「反キリスト教的」表現の最たるものとして Smith は次の場面を論じている。先ほど引用した、ペルカンが修道院を襲う場面の続きである。

第456節

ペルカンはたらふく食べた。
 もう二日も何も食べていなかったからだ。
 すると修道院長が言った。
 「欲しいものは何でも言うがいい」
 ペルカンは言った「これは、これは、高貴なお方、
 俺が食食物、飲み物を持ち去るのを許してくれ。
 俺が自分で食べるのではないのだ。
 他の仲間、そして俺がそれを必要とするのだ。

第457節

修道院長はそれを聞きながら怯えていた。
 彼は、他の仲間がそれを聞いているのではないかと思ったからだ。
 「好きなだけ持っていくがよい。
 お前の気の済むままに。
 たとえここにあるもの全部を持っていってもかまわん」
 ペルカンは答えた「ならばそうしよう。
 あんたは十字を切らない聖者はもとより信じないことだしな。

最後の行の原文は Smith による中高独語化では以下のようにになっている。

wenn an ein heiligen der nicht zeichnet welt ihr nicht glauben.

zeichnen を「奇跡を起こす」と取るべきか、あるいは「十字を切る」とすべきか、Smith は二通りの解釈を提出しているが、いずれにせよ、これはキリスト教徒への当てこすりだとするのが、Smith の説である。しかしながら筆者の考えでは、もともとペルカンは半獣の神話的な存在であり、ユダヤ教徒でもキ

リスト教徒でもない。^{*51} またそもそもキリスト教徒の聖職者に対する揶揄は、ドイツ文学にも豊富に見い出せるものなのだから、これを意図的な「ユダヤ化」とみなすのは詮索が過ぎないだろうか。もっともこの場面が、結果的にユダヤ人読者の琴線に触れた可能性は否定できないが。

Smith が「反キリスト教的」と主張するのは以上の三点である。最後に、物語の結末、ボヴォの結婚式の場面が、ユダヤ教の正月に設定されているのが、日時の特
定されていないイタリア語版からのきわめて重要な改編と述べられている。

「ユダヤ人が主人公である物語のハッピーエンドに、ユダヤ歴の正月以上にふさわしい時があるだろうか。[中略]こうして物語の結末をユダヤ教の正月に合わせ、聖書などの歴史上の事象を思い起こさせることが、結果的に物語をある種のユダヤ寓話に変えている。これこそ私には、本来キリスト教側の物語である *Bevis of Hampton* をユダヤの物語に変えるために *Levita* が行ったもっとも巧みで効果的な方法だと思われる」^{*52}

以上が Smith の博士論文における「ユダヤ化」についての議論である。

5 「イディッシュ化」としての改編

前章において Bovo 研究を代表する論者達の主張を見てきたが、ここではまとめとして、筆者自身がかつて《*Dukus Horant*》で論じた「ユダヤ化」と関連させながら Bovo におけるユダヤ性を考察したい。

《*Dukus Horant*》や中世イディッシュ語民衆本に認められるキリスト教的な要素の「中立化」は Bovo にも認められる。また改編は試みられているものの、原則的には原典に忠実である点も同じである。しかし Bovo のようにヘブライ単語を多用し、さらには割礼などのユダヤ教の儀礼を組みこんだ中世イディッシュ語テキストは、それがヨーロッパ語による世俗文学からの改編である限り

*51 些細なことだが、ペルカンがユダヤ教徒と理解されていないのは第455節からも窺える。そこではペルカンが、修道士によって屠殺された牛を食べているのだが、ユダヤ教の掟によれば、律法に規定された以外の方法によって殺された動物を食べることは許されていない。この戒律はユダヤ教の核心でもあり、古来厳密に守られている。

*52 Smith(1968), S.33.

において、他に例がない。^{*53} この点で Bovo は他の中世イディッシュ語の伝承と大きく異なる。上でも触れたように、例えば《Dukus Horant》にあっては、人物設定はユダヤ化されなかったし、ヘブライ単語はほとんどないに等しい。^{*54}

それに対して Bovo にあっては Schüler や Smith が主張する通り、登場人物、舞台はユダヤ世界に置き換えられているかのように見える箇所がある。しかしその一方で、母親を修道院に幽閉する描写があり、原典のキリスト教的背景が完全にぬぐい去られてはいない。また「ユダヤ化」の有力な手段とされるヘブライ単語が、異教徒としてはっきりモハメッドの信仰を告白しているサルタンや、キリスト教徒の巡礼によって使われている。これらはどのように理解されるべきであろうか。

筆者の考えでは、これまでの研究者達は、そもそも「ユダヤ化」をあまりに一面的に考えてきたように思える。Bovo の特定の箇所が「ユダヤ的」であるとか、ないという議論に見られる意見の不一致にも関わらず、研究者達は、「ユダヤ化」とは登場人物、背景をユダヤ人世界のそれに置き換えることだとの認識では一致していた。しかし「ユダヤ化」をそのように理解する限り、例えば Bovo で、ユダヤ教徒として割礼を受けた双子の祖母（ブランドニア）が修道院に幽閉される矛盾は決して解消されないであろう。

筆者には、Levita が原典の舞台、登場人物をユダヤ人世界に置き換えようとしていたとは思われない。もしそうであれば、修道院の記述は用心深く避けられたはずである。むしろ物語の舞台が相変わらずキリスト教世界であるのは、彼にとっても、ユダヤ人読者にとっても自明であったろう。

にもかかわらず Levita が「割礼」の場面を作品に組みこむことができたのは、そもそも彼にとっての「ユダヤ化」が、逆説的だが、物語をユダヤ世界に置き換えることではなかったからではないか。Bovo における「ユダヤ化」とは、キリスト教徒のイタリア語による原典を、彼らドイツ系ユダヤ人の日常語に、言語の上で置き換える作業であったのであり、それを越えるものではなか

*53 無論、ユダヤ的背景が豊富に盛り込まれたイディッシュ語作品も残されている。例えば《Schmuelbikh》や《Beria und Simra》がそうであるが、しかし前者は旧約聖書を素材にしたものであるし、後者はオリエントの伝説に由来するものである。Erika Timm(1975): Beria und Simra.

Eine jiddische Erzählung des 16. Jahrhunderts. In: Literaturwissenschaftliches Jahrbuch NF 14, S.

*54 拙論 (1992), S.304f.

ったのだ。物語はキリスト教世界が舞台であったが、それをユダヤ人の日常語、すなわちイディッシュ語で語るのが、Levita の改編の目的であったのだ。

例えば、一般のユダヤ人民衆の間で、結婚にまつわる概念は、常にヘブライ語で言われるものであったから、Levita も当然これを使ったのである。そして結婚式は、まさに Bovo に描かれたように進行するものであった。男の子が産まれば、割礼を施し、その上で名前を授けるのが、彼らにとっては自然なのだ。また、明らかにキリスト教徒として描かれている巡礼や、イスラム教徒であるサルタンが、ユダヤ人達の日常表現であったヘブライ語を口にするのも、Bovo における「ユダヤ化」が、登場人物を自分たちの言語によって語らせ、行動させる原則ゆえなのだ。^{*55} 聖書を想起させる章句も、キリスト教徒と共通の知識であれ、Bovo ではユダヤ民衆の言葉で語られた時、Schüler の主張する効果が期待できるのであった。なぜなら同じ民衆語による聖書の翻訳が、Bovo などの世俗の文学とは別の伝統を培い、民衆によく知られていたからである（例えば《Schmuel-bukh》『サムエル記』）。

原典がイタリア語であったから、Levita は、後の時代にドイツ語の民衆本から直接改編されたイディッシュ語伝承よりもずっと自由に振る舞うことが許された。^{*56} また彼の環境がドイツ語圏から離れていたことも重要な要因である。その地で彼の耳にするドイツ語は、ほとんど同胞であるドイツ系ユダヤ人のドイツ語、すなわち西イディッシュ語であったろう。同時にイタリアにおけるユダヤ教徒とキリスト教徒との自由な交流も、キリスト教世界の文化を違和感なく受け入れるための背景をなしていた。イタリアのユダヤ教徒にとって、日常必然的に接触するキリスト教徒達の生活、文化は、同時に自分たちの生活の一部でもあった。ある意味で Bovo にかいま見れるキリスト教世界とユダヤ教世界の混淆は、まさに彼らの現実であったのだ。

Bovo においては、舞台はユダヤ教世界に置き換えられず、言語の面においてのみ、ユダヤ人の日常語への移しかえがなされた。この意味で、Erik の主張する「中立化」は行われても「積極的」な「ユダヤ化」は試みられないとの考えは、いまなお有効である。筆者も以前《Dukus Horant》の分析で、中世イディッシュ文学においてキリスト教世界の物語は異教徒の物語として受け入れられ、「ユダヤ化」は必要なかったと述べた。いま Bovo もキリスト教世界で展開する

*55 卑近な例で恐縮だが、外国映画の「吹き替え」を思わせる。

*56 キリスト教世界に由来する物語ではないという事情もあるが、イタリアで16世紀に成立した《Beria und Simra》にも多くのヘブライ語や、ユダヤ教の概念が含まれているのも、Bovo との関係で興味深い。

物語として受容されていると考えれば、Bovoはこの点で他のイディッシュ語伝承の伝統に位置づけることができる。

そこで筆者は、Bovoの分析を通じて、キリスト教徒の言語による物語をユダヤ人の日常語に置き換えるという意味で、新たに「イディッシュ化」という概念を提唱した方が良いのではないかと考える。繰り返しになるが、これは「ユダヤ化」とは別のものである。これまでの研究者達の考えるような「ユダヤ化」は、Bovoを含め、世俗の中世イディッシュ文学ではなされていないのだ。

「イディッシュ化」の観点から、これまでの伝承を検討すると、ドイツ語圏で成立したイディッシュ文学には、確かにBovoに比べ、ヘブライ語も、ユダヤ教の概念もきわめて少ない。筆者はそれを原典の言語と、日常接するキリスト教徒のドイツ語の影響と考える。しかしながら、たとえ僅かにせよ、イディッシュ語に独自の概念もテキストに現れることがある。例えば《Dukus Horant》ではキリスト教会を表すのに、ドイツ語のkircheの他、ヘブライ・アラム語起源のイディッシュ語である tifla も用いられている（そしてこれがテキスト中、唯一のイディッシュ語である）。ユダヤ人はかつてキリスト教徒の教会をこのように呼んだのである。従って、舞台を「ユダヤ化」したわけではない。なぜなら、ヘブライ語系統の単語を用いることによって、キリスト教会をシナゴークへと置き換えているわけではないのであるから。ヘブライ語を使おうとも、キリスト教的背景は明白なのである。筆者は以前、これは「ユダヤ化」ではないが、ユダヤ人読者を顧慮した用法であると論じた。^{*57} つまりキリスト教徒の言葉を、ユダヤ教徒の日常語に置き換えているのである。これを筆者はあらためて「イディッシュ化」と呼びたい。

そして Bovo は確かに他のイディッシュ語の世俗文学と比べると、「イディッシュ化」の度合いの強い作品ではあるが、その程度は、翻案者の能力、環境に

*57 拙論 (1992) S.308.

なお、注で触れた以外にも以下の書を参照した。

Fr. Chr. Benedict Avé Lallemand(1862): Das deutsche Gaunertum.

1. Aufl. 4 Bde. Leipzig, Neudruck Hildelsheim(Olm) 1980.

N.B.Minkoff(1950): Elye Bokher un seyn Bovo-Bukh [in Yiddish].

1. Aufl. New York(M. Vaxer Publishing House).

Sh. Dazhanski(1962): Elia Bokher - Bovo Bukh [in Yiddish]. 1. Aufl.

Buenos Aires(Confederacion Pro-Cultura Judia).

現代ヘブライ語辞典 (キリスト聖書塾、1984).

左右されるところでも、中世イディッシュ語文学に共通して認められる重要な特徴として理解されるべきであろう。

(本研究は、平成6年度文部省科学研究費奨励研究(A)課題番号06851065の成果である)